

連載  
第76回

## 福聚山史

文池浦泰憲

淀橋町、成子町は  
どんな町だったか

前回は、柏木村の淀橋町に大田南畝の寓居があり、南畝と柏木の地との縁について触れた。ところで、柏木村にある南畝が身を寄せた淀橋町、隣接する常圓寺の建つ成子町とはどんな町だったのだろうか。

## ●内藤新宿の出入り口

宿場町である内藤新宿は、江戸と甲州・信州方面、江戸と武蔵野・多摩地域、それぞれをつなぐ基幹道路の合流地点として栄えたが、柏木村の淀橋・成子両町は後者の「青梅街道」沿いに位置し、内藤新宿の出入口であった。その景観は、内藤新宿の内と同じように、往来する人を相手に、多様な店が立ち並び、商売人が居する町並みが続いていたといわれる。

## ●淀橋町と成子町の違い

天保七年（一八三七）八月、柏木村と隣接する中野村一帯に施行が行われた。施行とは、人に物を施す布施の行という仏教用語であるが、江戸時代、飢饉などの際に、富裕な町人が困窮する人々に私財を与え、救済した。

この時期は米価が異常に高騰し、幕府から困窮する民衆へ御救米銭などを供出する一方で、富裕な町人による施

行が奨励された。この時の淀橋、成子各々で施行を受けた「其日稼」と呼ばれる困窮者の軒数をみると、淀橋町は二五軒であるのに対し、成子町は二八八軒であったという。

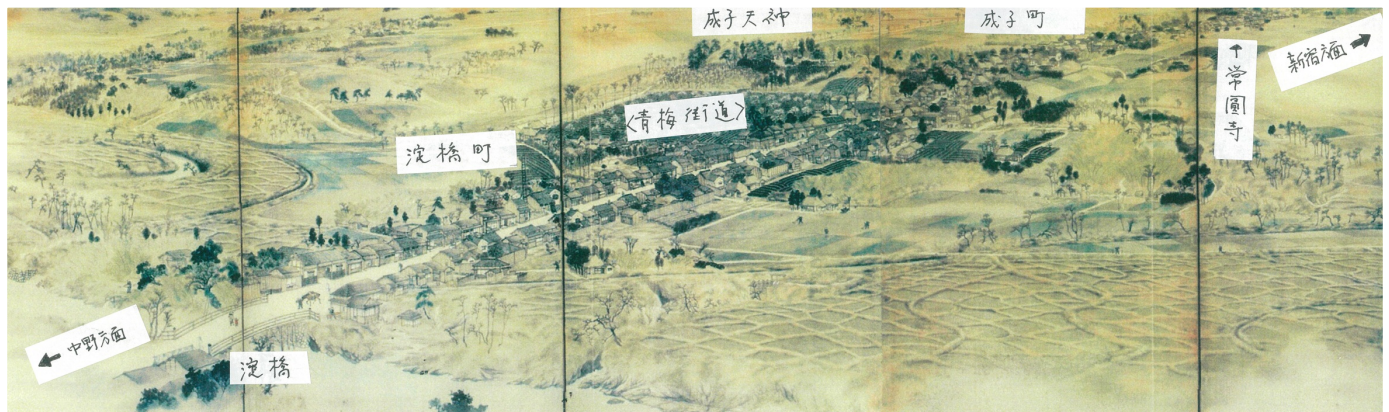
このように淀橋町と成子町では、施行を受けねばならない人々の数に大きな差があり、また施行を行う富裕な町人が成子町からは一人もないのに対し、淀橋町からは三人が出ている。隣接する町でありながら、その町柄には大きな違いがあったと推定される。

そして、このように其日稼が多く住む成子町には、「時之物売」といわれる職種が多かったという。時之物売とは、時に応じて、雑多な商品を僅かな元手で仕入れ、販売するような、まさにその日暮らしという人々であったと想像できる。

## ●農村と都市をつなぐ町

このような成子町は、日本橋など江戸の中心にある町から見れば場末であるが、農村部から見れば江戸の窓口でもある。こうしたことをよく反映しているのが、当時成子町にいたという粉糠売、草箒売である。

農民にとって糠は貴重な肥料であったが、上質の糠は村では手に入らなかったという。そのため町で購入しなければならなかった。また草箒は、農



「柏木・角筭一目屏風」：明治元年の柏木・角筭の光景を故南雲善左衛門氏の記憶に基づき、昭和2年に描いたもの（『図録「柏木・角筭一目屏風」の世界』（新宿区立新宿歴史博物館 1990年）より転載し手を加えた）

民が農作業の合間に製作したものを町の商人が購入し、販売していたものと推測される。

つまり、農民は米・麦などの穀物類、朝取れた新鮮な野菜・果物類、薪や炭、あるいは農作業の合間に製作した製品などを馬に付けて江戸に入る。そして帰りは、下肥・糠・灰などの肥料、村では入手できない品を馬に付けて帰る。当時はこうした光景があったのではないだろうか。さらに、農民は運んできた作物を江戸の町まで運ばず、街道沿いの商人の所で卸し、江戸での販売を依頼する場合もあったという。幕末の頃の記録には、淀橋・成子それぞれ米穀問屋が十数軒あったことがみえるのはこうしたことを示していると考えられる。

以上のように、淀橋、成子両町は、商品売買を通じた武蔵野・多摩地域の農村と都市である江戸との交流の場だったようである。

## ●多くの人々が行き交う町

江戸後期の読本作者、滝沢馬琴の残した日記によれば、家族が堀之内の妙法寺に参詣した帰り、淀橋で見つけたといって「新麦七合、梅びしほ曲物入」（新麦七合と曲げ物に入った練り梅）を持ってきてくれた、という。（『馬琴日記』嘉永元年（一八四八）七月二五日条）。

淀橋町、成子町は、十二社や中野の宝仙寺、堀之内妙法寺などへ物見遊山する江戸の多くの人々が土産物を買いたい求める場所でもあったのだろう。こうした人々の交通も両町の景観を特徴づけていたのではないだろうか。